

自律的「人財」の育成



内田 淳正

(三重大学 学長)

はじめに

自律的「人財」とは、「自分が何をすべきかを知り、その実践のための方向性を定め、主体的かつ継続的に物事をすすめていくことができる人」である。そのような人財の養成が大学の目標の一つであると認識している。大学にとって人は財産であるとの観点から「人財」(ヒューマンキャピタル)という漢字を使うことを推奨したい。そのため、三重大学は「感じる力」、「考える力」、「コミュニケーション力」とそれらを総合した「生きる力」の「四つの力」を涵養することを教育目標に掲げた。書物や授業を通して得た知識を真に自らのものとした自律的人間となるためには、認知的な知識の上位にある非認知的な知的能力である「鋭い感性」、「強靱な思考力」、「豊かな会話力」と「的確な判断力」を身につけることである。教師として認知的知識を教えることはそれほど難しくはないが、身につけてほしい感性、思考力、判断力をどのようにして伝えるかの的確な方法は明確にされていないところに教える側の迷いがある。一方、学生側の欲求も大きく変化している。これま

で一般的と考えられていた知識は欠乏していても、インターネットやゲームのために意外なことを非常に詳しく知っていることに驚かされる。教える側と教えられる側の要求の乖離は確実に増大している。

教育方法の改善

発端はこれまでの教育方法のマンネリ化への反省であろう。特に、従来の講義形式への問題点が指摘された。認知的知識の詰め込み教育では、詰め込みだけ詰め込み、入れた端から忘れていくという、非常に効率の悪い結果となる。高等教育ではむしろ、問題に直面したとき、どのように解決すればよいのかが自分で判断できるようにする教育が必要である。学習の仕方を学習させることになる。「成人教育理論 (adult learning theory)」では、自分に何が必要かを常に考えて行動する自律的勉強法を推奨している。しかし、大学生になっても与えられて勉強している現状をみると、自分を内省しながら「何を勉強すべきか」を考える積極的な姿勢を、教える側が援助する形にしなければならない。教育方法も研究から得られた新しい理論的根拠に基づいて改める evidence-based education の利点が強調されている。Pedagogy (子ども教育学) から Andragogy (成人教育学) への転換が求められている。この成人教育学に基づき、学生の能動性を引き出す授業形式の一つとして、ブレゼンテーション型授業、グループ学習、PBL、チュートリアル教育が導入された。このような教育方法はわが国が伝統的に重視してきた寺子屋や私塾にみることでできるが、これまで理論的体系化がなされることはなかった。

三重大学では、先述した「四つの力」を涵養するための基軸となる初期の教育プログラムの一環として、課題探求型少人数教育であるスタートアップセミナーを本年より実施している。

医学教育

特に医学部では、生物医学 (bio-medical science) 教育一辺倒であり、これさえ教えていけば医師が育つと考えられていた。専門家指向の教育である。社会には専門医と、プライマリケア医・家庭医の両方のニーズがあるにもかかわらず、その片方だけが養成される傾向があり、患者だけでなく、地域住民の健康問題、福祉、高齢者医療などの社会のニーズに合わなくなってきた。急速な高齢化に相俟って、これらの問題が一層鮮明となってきた。その上に、医師として非常に重要なコミュニケーション能力の教育が不足していることも、臨床現場を通して明確とされた。そのような背景の中、新しい取り組みとして PBL チュートリアル教育、クリニカルワークショップと実践的教育が注目されてきた。

医学教育の先進諸外国では、当然のことながら、社会のニーズに合わせて医学教育の方法を変えてきた。イギリスの General Medical Council では、一〇年ごとに医学教育に関する勧告を出している。「情報の詰め込み教育の削減」「医師としてふさわしい精神や行動の態度を植えつける」「責任を持つことのできる医師を育てる」「コミュニケーション技術やその他不可欠な基本的臨床方法については強調されなければならない」などである。さらに、勉強する姿勢には適切な評価方法が重要であろう。評価の仕方によって学生の学習態度が変わるといわれている。PBL チュートリアルでは学習の仕方をテストする。医学技能なら OSCE (objective structured clinical examination) で評価するなど、それぞれに適した評価方法を選択することになる。それにより、長く記憶に残り確実に体得できる勉強方法が確立可能となる。これらは、わが国の医学教育に不足していたことであり、教育方法の見直しが始まり、臨床実践の場でのチーム医療が推進された。指導医、研修医、クリニカルワークショップの学生がチームを組み、常にチームで動き、ディスカッション、患者診察を行うという形をつくりあげる方法である。チーム内での個々人の役割・責任を分担しあい、学んでいく。これにより教員は自らの臨床や研究に専念する時間を確保することができ、研修医 (他学部では大学院生やポスドクに相

当する)は学生を教えることにより自らの意識や臨床能力を高める。また、学生は身近な先輩の指導を受けることにより、自らの知的能力の開発に積極的に取り組み易くなる。

高等教育のあるべき姿

高等教育はマンツーマンが本来の姿であろう。「どの学校に入るのか」ではなく「誰に学ぶか」、そして「何を専攻するか」、「何を学んだか」が高度な専門知識を学ぶ大学の教育である。本来有るべき姿としては「自分は何を学びたいから、この方面での第一人者である誰々先生の下で学びたい」であろう。そのためには、学長や教員の顔はもつと見えてこななければならない。法人化後、国立大学の情報発信量は大幅に増えているが、高校生が大学の魅力を感じて選択するまでに至っていないと思えない。

高校の教育にも問題がある。高校が単なる受験予備校化している中で、学力低下が指摘されている。五〇%以上が大学入学を果たす時代であるため当然といえば当然であろうが、この問題の解決は容易ではない。高校を大学での専門教育を受けるのに必要とされる基礎や一般教養を与える教育機関と位置づけ五年制とするか、現行の大学入学時に学部を決めない教養課程を二年間程度設けるか等の大幅な制度の改革が必要と考える。まずはあるがままの自己肯定で自分力を向上させなければならぬ。社会の急激な変化によって持たされる性急な結果の要求に惑わされて最初のステップを曖昧にしたままの行動となっていることが多い。そのことを後になって気づき悔やむことになる。立ち止まってゆっくりと将来像を描くことで正しい出発点を設定できずである。

おわりに

幕末から明治維新にかけて実に多くの人材を輩出したことで知られている適塾は主宰者である緒方洪庵の教

育方針に根ざした塾風を鮮明にしている。その風に惹かれて多くの有為の人材が集まった。大きな集団となったが教育の方法はマンツーマンに近いものであった。洪庵の指導はもとより先輩が後輩を教える形態が自然にできあがり、お互いが切磋琢磨した。福沢諭吉は「凡そ勉強ということについては、この上にしようも無いほど勉強した」と述懐している。志をもつて、教えながら学んだことが多くの「人財」を輩出した源であろう。まさに学は志である。

緒方洪庵について書いた司馬遼太郎氏の一節を最後に引用する。「世のためにつくした人の一生ほど、美しいものはない。ここでは、特に美しい生涯を送った人について語りたい。緒方洪庵のことである。この人は、江戸末期に生まれた医者であった。かれは、名を求めず、利を求めなかった。あふれるほどの実力がありながら、しかも他人のために生き続けた。そういう生涯は、はるかな山河のように、実に美しく思えるのである。」

参考文献

津田司ら 医学教育一六(六) 四五六―四六八 一九八五